

くすねの里だより

第十二号

風雅にぞよぐ秋の草花

ひんやりと心地よい夜気に誘われ外に出れば、月明かりに輝くススキの穂。秋はすべてがゆつたりと、詩情にあふれて見えます。

ススキは秋の七草のひとつで、現代においても身近によく見られる植物のため、小さな子供にも親しまれています。では残りの六草ってなんだかわかりますか？万葉集の中に山上憶良が詠んだ「萩の花 尾花葛花 撫子の花女郎花 また藤袴朝顔の花」という歌があり、それによって秋の七草が定着したと言われています。

萩の花（ハギ）はマメ科の落葉低木で、現代でも公園や庭に植栽されたものを見かけます。尾花はススキのことで、穂が動物の尻尾に似ていることから尾花と呼ばれるようになりました。葛花（クズ）は野山や空き地で他の植物を覆い隠すように伸びるツル植物で、根から取れるデンプン「くす粉」は、吉野のものが特に有名です。撫子の花（ナデシコ）はカワラナデシコという種が「大和撫子」の別名で親しまれ、自然の豊かな地では今でも河原などで見かける事ができます。女郎花（オミナエシ）は粟飯のように小さな黄色い花が集まって咲きます。藤袴（フジバカマ）は絶滅危惧に指定され、園芸種はたくさん出回っているものの、野生ではほとんど見られないのだとか。最後の朝顔の花ですが、現代でお馴染みのアサガオではありません。はつきりと解明されていなく、キキョウやムクゲが有力とされています。

このように千年以上前には身近であった植物から選ばれたであろう秋の七草も、現代においては雑草として嫌われるススキとクズががんばっているという程度になってしまいました。あと千年先には日本の植物はどうなっているのでしょうか？

秋になるとお花屋さんではオミナエシやフジバカマなどが切り花として売られています。お月見にはススキと共に秋の七草を飾ってみはいかがでしょうか。



お月見には旧暦8月15日（今年は10月3日）にあたる十五夜と、旧暦9月13日（今年は10月30日）にあたる十三夜とがあり、片方だけの月見は「片月見」と言われて嫌われます。

また、お月見は収穫に感謝をするお祭りでもあり、ちょうどその時期にとれた作物を、おだんごやススキと一緒に供えます。十五夜は栗いもを供えるので、「芋名月」十三夜は栗を供えるので、「栗名月」とも呼ばれています。

